



TITLE:

# 他動詞文のゆらぎ現象に関する「構文」的アプローチ

AUTHOR(S):

李, 在鎬

---

CITATION:

李, 在鎬. 他動詞文のゆらぎ現象に関する「構文」的アプローチ. 言語科学論集 2001, 7: 1-20

ISSUE DATE:

2001-12

URL:

<https://doi.org/10.14989/66961>

RIGHT:

# 他動詞文のゆらぎ現象に関する「構文」的アプローチ

李 在鎬

(リ・チェホ)

京都大学

cheho@hi.h.kyoto-u.ac.jp

## 1. はじめに (本研究の目的)

本稿は、構文文法の枠組みに基づいて、日本語の慣習的統語フレーム「XガYニVする」の意味的動機付けに関わる諸問題を考察するものである。主として、統語フレームと動詞のずれから生じるゆらぎ現象を取り上げ、記述レベルの分析を行う。そして、この分析によって得られた知見が他の言語事実に対して、いかなる展望を示してくれるものか、検討していくことにする。本稿のもっとも基本的主張は次のようにまとめることができる。「日本語の文の基本を支える統語フレームはそれ自体として、形式と意味の対をなす」ということである。本稿では、この主張を裏付けるため、周辺からコアに至る様々な言語事実をもとに、動詞を中心とする研究プログラムを批判的観点から検討した上、日本語の言語事実に対する適切な記述の枠組みとして「構文 (construction<sup>1</sup>)」的アプローチの必要性を主張する。

考察に順序としては、1) 本稿が注目するゆらぎ現象の具体事例を挙げるとともに、この種の現象がゆらぎとして捉えられる根拠を述べる。そして、2) 従来の研究においてこの種の現象がどのような観点から捉えられてきたかを概観した上、3) その分析、ないしはその枠組みが抱えた二点の問題点を指摘する。そして、4) この問題点に対する代替案としての本稿のアプローチが持ついくつかの方法論上の問題について考察する。これらの考察を踏まえ、5) ゆらぎ現象を許容しうる言語的システムとして、「構文」の位置づけに関わる諸問題へ議論を移行し、「XガYニVする」の具体事例の分析を行う。そして、結論として、6) 本稿のアプローチが統語フレームと動詞の結合の問題に対して、どのような展望をもたらすものかを考えるとともに、このアプローチが示す記述的利点について考察してみたいと思う。

## 2. 本稿が着目する現象とその振舞い上の特性

本稿は、他動詞文のゆらぎ、とりわけ以下の事例をめぐる記述的問題から考察をはじめ。

1. その思いどおりの方向にことが運んだのだから、半分はおれの意思によって、あの快拳をなし遂げたと考えてもよさそうである。(和久峻三「幽界戦士」)
2. 黒田邸に軍兵がよせるという知らせがあった。(川又千秋「時間帝国」)
3. グリーンヒルズと呼ばれるビル群の最上階には常に陽光が注いでいる。(水沢蝶児「獅子と薔薇の銀河」)

1から3までの現象において、傍点部に注目した場合、その主動詞となる「運ぶ、寄せる、注ぐ」と文全体を支えている統語フレームとの間で、ある種のずれが生じていることは容易に観察できる。動詞とその統語フレームの不一致に焦点を当てた場合、1から3の形式的特性、ないし

<sup>1</sup>本論が進むにつれ、明らかになることではあるが、本稿のアプローチにおいて「構文」という訳語は認知言語学によって共有される「construction」の位置づけを必ずしも充分には反映していない。時として、誤解を招くおそれもあるが、議論の便宜上、以下では「構文」と記す。その詳細は5節以下の先行研究が示すように、本稿が「構文」と称するものは「形式と意味が対をなすユニット」であり、文のみならず、語や句レベルにおいても認めることができる。この点において、従来、記号操作の結果として派生される形式的副産物という意味での構文とは根底から異なる位置づけを持つことに注意していただきたい。

はその振る舞い上の特異性は以下の二点としてまとめることができる。

- (1) 他動詞でありながら、ヲを伴っていない
- (2) 他動詞専用の動詞が自動文型に立ちながらも、受動態を取っていない

「運ぶ、寄せる、注ぐ」といった動詞はいずれも、従来他動詞として記述されてきたものである。しかし、1から3までの事例を見る限り、いわゆる共時態として他動詞故に満たすべき統語的制約を明らかに違反している。しかし、問題は、それにも関わらず、上記の事例は文法性の問題を完全にクリアしていることである<sup>2</sup>。

まず、(1)が示す問題に関しては、同一の動詞からなる以下の事例と比較してみよう。

- 1'. ウェイターがテーブルに皿を運ぶ。
- 2'. 太郎が道路のわきに車を寄せる。
- 3'. 太郎が茶碗にお湯を注ぐ。

1'から3'は、1から3までの事例におけるそれぞれの動詞から、想起されるもっとも一般的な文タイプである(詳細な考察は5節以下)。こうしたことから「運ぶ、寄せる、注ぐ」といった動詞は従来、使役移動を表す動詞と分析されてきた。そして、こうした語の特性から、1'から3'の統語フレーム「XガZニYヲVする」は上記の動詞の下位範疇フレームとして認定できるものと理解されてきた。しかし、1から3までの事例においてはそのいずれも「XガYニVする」において生起しており、他動詞でありながらもヲを伴っていない。こうした現象は日本語全体が持つ体系の中で、きわめて重大な問題を引き起こす。というのは、他動詞故に満たされるべき制約、つまり、「統語上の制約としてヲ格をとる」こと、「意味上の制約として主体が働きかけをする」ということに対して、反例として位置付けられることになる。

次に、(2)の問題として、上記の動詞は、従来無対他動詞、および他動詞専用の動詞と理解されており、影山(2001)によると「他動詞を自動詞的に使うためには統語的な受動構文が必要である(影山(編)2001:17)」という制約を違反している。

4. a. 皿が運 b-a re ru.  
b. \*皿が運 b-u.
5. a. 車が寄せ ra re ru.  
b. \*車が寄せ ru.
6. a. お湯が注 g-a re ru.  
b. \*お湯が注 g-u.

4から6までの事例のaとbの容認度の違いからも分かるように、他動詞は一般に自他交代において「受身形」をとらなければならないと規定されてきた(影山1996, 上野・影山2001参照)。

<sup>2</sup> 本稿では、上記の動詞「運ぶ」「寄せる」「注ぐ」をいずれも他動詞として位置付けているが、これに関してもある観点においてはかなり疑わしいものがある。それは、まず「注ぐ」の場合、その原型となる「注く」は、岩波古語辞典によると、自動詞としての用法がむしろ優先されており、「水が激しく流れ出る」という意味で「長き瀬注ぎ深る」(日本書紀・応神二二)の事例が掲載されている。さらに、「寄せる」の原型となる「寄す」の場合、他動詞が優先されているものの、「重波の寄す浜辺に」(万・三三三九)といった自動詞の事例が古くから使用されていた。よって、発生的な観点から考えてみた場合、この種の事例において、むしろ自動詞的な用法が典型事例であった可能性は十分考えられる。なぜならば、現代日本語を話す人々にとって周辺的と思う事例であっても、本来はそれが典型的例で、今は消えてゆきつつあるところも十分にありえるからである。ただ、少なくとも現代語の話者にとって、これらを自動詞であるというのはやや無理があるといえよう。この問題に関しては、日本語そのものが持つ歴史的事実からプロトタイプを求めるか、それとも、現在の使用者からプロトタイプを求めるかという視点の違いがあるといえよう。いずれにしろ、本稿は自他問題の語のみではなく、その統語フレームでもって考えていくというアプローチをとっている点、そして、他動詞であっても、自動詞的な用法が現実存在する点を指摘するものであり、上記の動詞がたとえ、自動詞であるにせよ、他動詞であるにせよ、語レベルで自他がゆれている点に関しては同種の位置付けを持つものであり、こうした問題に対する統語フレーム上の制約を考えるという観点に立つ。よってこれらの動詞が自動詞であるにせよ、根本的には本稿のアプローチと何ら矛盾しないものである。

しかし、1から3までの現象に関しては、意味上 4.a、5.a、6.a と平行した意味解釈を持ちつつも、統語的受身形をとっていない。

上記の二点の振舞い上の特性から、1から3の現象は他動詞文のゆらぎとして位置付けられる。なぜならば、1から3までの現象はそのいずれも、典型的な語の内部特性からは予測困難な振舞いを見せており、日本語における一般的傾向とは明らかに相反する振舞いを見せているからである。

この種の振る舞い上の特異性は、現象の数の面では、そう多くない理由から、従来の研究においてはあまり注目されることもなければ明確に議論されることもなく、事実確認レベルに留まっていた(国立国語研究所 1971、島田 1971、森田 1990、国広 1997 参照)。本稿では、この種の周辺事例こそ、日本語の文形成論における本質的問題を考える上で、より有効な枠組みを示唆している現象と考える。以下においては、上記の現象の記述レベルでの一般化を目指すとともに、その使用の動機付けの問題について考察する。

### 3. 従来の研究

#### 3.1. ゆらぎ現象に関する従来の捉え方

ここでいう従来のアプローチとは、本稿の問題に関連付けて言えば、広意の語彙意味論的枠組みにおいて採用されてきたアプローチを指す。とりわけ、村木(1991)で代表される動詞を中心とする記述文法のアプローチを指す。主として、この種のアプローチは、動詞の機能に焦点を置き、文形成の大枠を捉えようと試みている。

以下では、従来の研究におけるゆらぎ現象の具体的分析の一事例として、自動詞文のゆらぎ現象を取りあげる。そして、この種の研究によってもたられた分析がどのような展望を示せるか、検討する。

- |    |    |                  |              |
|----|----|------------------|--------------|
| 7. | a. | 話を終わる。           |              |
|    | b. | 話を終える。           | 水谷(1964:46)  |
| 8. | a. | 犬がしっぽをたれて歩いている。  |              |
|    | b. | 犬がしっぽをたらして歩いている。 | 須賀(1980:132) |

7から8までの現象に関して、まず、確認しておきたいこととして、どの動詞も形態として自他のペア(「終わる / 終える」「たれる / たらす」)を持つ点である。しかし、それに関わらず、文の成り立ちにおいて、前節の1から3同様、統語フレームと動詞の間で大きなずれが生じている。7を例に考えてみた場合、動詞と統語フレームの間で、次のような不一致が生じている。ヲと動詞の連動から考えるならば、本来、他動詞である「終える」と統語フレームの共起は、bのみが容認されるはずである。しかし、実際の日常言語表現においては、aのように、自動詞である「終わる」も、「XガYヲVする」と共起しうる。こうした現象は、自動詞が持つ語の内部特性からは、単純には予測不可能なものとなり、日本語の体系をうまく反映していないものとして扱われる。というのは、コアな事例であれば、あるほど、その事例は日本語が持つ体系を鮮明に反映しているものと規定でき、反対に、周辺であれば、あるほど、そこには日本語の体系を明確に反映する必然性はないものと考えられてきた。こうしたことから、aのような現象はしばしば、「自動詞文のゆらぎ」として位置付けられてきた。同じく、8においても同様の問題が生じていると言える。

次に、従来、この種の現象を分析するにおいて、ほとんどの研究が当該の動詞のカテゴリーの問題に議論が集中していた。すなわち、当該の動詞が他動詞に属されるべきなのか、それとも自動詞に属されるべきなのか、という問題に収斂する分析が主流であった。上記の現象に関して言えば、以下のような分析がなされてきた。

- ① 水谷(1965)・須賀(1980): 自動詞
- ② 櫻井(1977): 他動詞

それぞれの分析の詳細については議論しないが、こうした分析によって生じる記述の整合性の問題は今後の考察において、重要な意味を持つ。というのは、7や8の事例に関して、語(動詞)のみを見た場合、上記のいずれの分析も必然的な矛盾、もしくは不十分な記述にならざるを得ないのである。それは、語としての側面に着目し、aの類を自動詞である-「終える」に対する「終わる」、または、「垂らす」に対する「垂れる」の対立に基づいて自動詞である-と分析した場合、文論、すなわち、文全体を支える統語フレームとの間で生じる不一致が捉えられず、不十分な記述になる。というのは、自動詞であるにも関わらず、ヲと共起可能であるという言語事実が不明瞭になり、文全体において生じる他動的意味の処理問題が生じる。と同時に、②の分析においては、ちょうど、①とは逆の問題が生じる。というのは、文論に依拠し、他動詞と規定しても、語論との間で同種の矛盾が生じる。なぜならば、本来自動詞であるものがなぜ他動詞になりえるのかという問題に対して、アドホックさを残す分析にならざるを得ない。さらに、②の分析は、次節で述べることになるが、一つの語において、二つの文法カテゴリーを認めることで、もっと深刻な問題を引き起こす。このように①と②のいずれの分析においても、片方を捉えるため、もう片方の事実と矛盾を引き起こすという問題が生じてしまう。このように、動詞の意味だけに頼るアプローチでは、結局のところ、結論の出ない循環論を繰り返すだけであり、問題の本質は闇の中に葬られてしまう結果となる。

従来、語の特性に基づくアプローチのもう一つの分析の手法として、新たなカテゴリーを作ることによって結論付けることもしばしば行われてきた。言うならば、例外处理的なアプローチと言えよう。本稿の現象に関して言えば、国広(1997)の「中動詞」的なアプローチがこれに当てはまる。

9. a. 机を窓際に寄せる。

b. 波が岸に寄せる。

国広(1997:270)

国広(1997)では、自動詞と他動詞の区別を認めつつ、そのいずれにも収まらない中間事例に対して「中動詞」という新たなカテゴリーを認めることで解決を模索している。9の例に関して言えば、aを他動詞とし、bを中動詞と規定している。しかし、この記述には非常に大きな問題点を含むことになる。その詳細は、次節において考えることにする。

### 3.2. 従来の分析における問題点

前節で概観した国広(1997)による提案、および、櫻井(1977)、須賀(1980)的な分析においては、大きな問題を含むことになる。とりわけ、以下の二点の問題が指摘できよう。

(3) 語に対するアドホックな扱いから生じる問題

(4) 日常言語の多様性から生じる問題

(3)の問題においては、その背後の流れとして、文現象の記述に関する次のような捉え方がある。日常言語現象をきめ細かく観察していった場合、互いの文を支える統語フレームの相違による微妙な意味的相違が見られる、と同時に、動詞の意味とそれが生起できる統語フレームの間には強い相関関係がありそうだ、という直感が働く。その結果、多くの研究者は、どの言語であっても、動詞が生起しうる統語的環境は動詞の語彙的意味から特有の方法で、予測可能なのではないかと考えるようになった。こうした議論の流れによって生じる典型的問題として、(3)が示すような問題がある。

一つの語に対して二つの文法範疇を認める記述的ストラテジーにおいては、語の扱いに関する深刻な問題が生じる。これは、動詞と統語フレームがある種の相関関係をなすという直感をもとに、一つの動詞が二つ、ないしは、それ以上の統語フレームにおいて生起可能であるという事実を整理した場合、しばしば起こりうる分析で、動詞の機能に対して過剰な一般化を行うことである。しかし、この種の分析が主張する語の特性たるものの経験的根拠はそれほど、明確ではない。その代表的例が従来の研究に見られるゆらぎ現象の分析である。具体的にみると、

日本語の他動詞と「XがYヲVする」に見られる生産的相関関係に基づいて、7.aの自動詞「終わる」が「XがYヲVする」においても生起可能だという事実を整理した場合、「終わる」に対して、他動詞という下位範疇を認めることは、一見、妥当なものとも思われる。そして、当然のことながら、「XがVする」と「終わる」の生産的相関から「終わる」は自動詞であるという分析も可能となる。しかし、こうした従来の分析によって示された語の特性は、そのいずれも語の特性ではないことを自ら証明する矛盾を引き起こす。上の分析における語の特性、すなわち、「終わる」は、自動詞でもあれば、他動詞でもあるという分析は、逆の意味で次の分析を支持することになる。「終わる」という語は、語の特性として、自動詞としての経験的根拠も曖昧であると、同時に、他動詞としての経験的根拠も曖昧であることを、自ら示すことになる。なぜなら、当該の語が規定値として、二つの下位範疇を持ちうるならば、その語のみでは、いずれの下位範疇も経験的な保証は得られないことになってしまうからである。となると、その語の範疇は、本質的には語の外側からの制約に委ねられることになる。よって、この種の分析は、次のような推論を導く。一つの動詞に対して、二つの下位範疇を認める分析では、動詞が属すべきカテゴリーは恣意的なものとして位置付けられ、いずれの範疇に関しても語そのものによって動機付けられたものではない。

次に、(4)の問題として、理論によって固定された規則から、扱えない事例が生じるたびに、新たなカテゴリーを増やしていく論法は、ある種、研究プログラムとしての欠陥を示す。こうした問題意識は、いわゆる記述の歯止めということを意識した場合、しばしば問題になる。というのは、言語が持つダイナミックな性質を考えた場合、新たな拡張事例が使用されるたびに、新たなカテゴリーを増やしていく論法に従うならば、現実問題として、“言語にどれだけの文法カテゴリーが存在するのか”という問題は、全く不透明なままのものとなり、実質として現象を記述したことにはならない。以上の問題から、本稿では冒頭の1から3までの現象について中動詞的論法は支持しない。

本稿では、冒頭の現象について、基本的には他動詞の具体事例として捉える。しかし、この規定においても、事実、これまでの問題を引きずっており、次のような記述的要請に答えなければならない。それは、1) なぜ、他動詞が自動文型に表れうるのか、2) 他動詞に還元できない自動性はいかに処理されるべきなのか、という問題である。これらの問題に関して、本稿では、統語フレームの機能論的側面に着目し、冒頭の現象は、本質的に統語フレームの問題として捉えるべきであると考え、「文法構文」として捉えなおすことを目指す。

#### 4. 方法論上の諸問題

##### 4.1. 統語フレームの意味を認める上での問題点

本稿では日本語の格助詞パターンによって成り立つ文型、すなわち統語フレーム、そのものが文形成において、意味上のインデックスをなすものとする。しかし、この種のアプローチに関しては、いくつか考慮されるべき問題がある。ここでは、以降の分析に入る前、今後の考察がもたらすであろういくつかの難点について考えてみたいと思う。

10. ジロウがオヤルルを殺したぞ！ (矢野徹『カムイの剣』)
11. わたしと娘を不幸のどん底に追い込むことになったきっかけは、主人が交通事故で死んだからです。 (筒井康隆『日本以外全部沈没』)
12. 生徒たちが二階に上がった。

10においては、ジロウという主体とオヤルルという客体の間で、ある種のエネルギー伝達が行われ、オヤルルは影響を受けるという事態が表現されている。言うならば、他動的事態と相関をなしている。そして、11は非対格動詞文で、外部から受けた何らかのエネルギーによって、「ガ」で示される主体自身に何らかの状態変化が生じるという事態と相関をなす。そして、12は非能格動詞文で、「ガ」で示される主体自身の内在的エネルギーによってもたらされた自律的行為として、「ニ」でマークされている物理的空間に位置変化を起こすという事態が表されている。こ

これらの事例を Taniguchi(1994) および、山梨 (2000) の事態のエネルギー連鎖という観点から特徴づけた場合、以下のように図示できる。

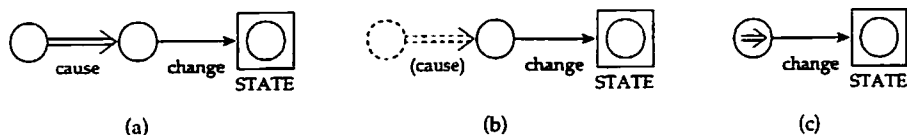


図1

図1の(a)は、10に対応するもので「X(ジロウ)」から「Y(オヤルル)」への物理的なエネルギーの伝達が行われ、「Y」が状態変化を起こすという事態が表されている。そして、(b)は11に対応するもので、外在的エネルギーにより「X(主人)」がある状態へと変化を起こす事態が表されている(外在的エネルギー故に、アクションチェーンのヘッド部分は背景化されることになる)。そして、(c)においては「生徒」そのものが持つ内在的エネルギーによってなされる、自律的行為とその位置変化を表している(サークルの中の二本線は、そのもの自体に備わっているエネルギーを表す)。

しかし、この種の規定において問題になるのは、図1の自動性、および他動性が何によってエンコードされているのかである。それは、10と(a)、11と(b)、12と(c)のみを対応させて、考えてみた場合、実質、動詞の機能、すなわち10の他動詞、11の非対格動詞、12の非能格動詞の機能によって記号化されていると考えることも何ら無理のない分析と言える。この種の分析に従うならば、実質、統語フレームの意味上の制約は単なる理論仮構物と何ら変わらないものとなる。なぜならば、動詞の情報と文における統語フレームがスマートに相関関係をなしている点において、動詞に対する還元論的アプローチをとっても、これといった経験的問題に直面することはないからである。こうした見方は日本語におけるほとんどの事例、とりわけ、コアな事例を見る限りにおいては、一見妥当なものと思われる。

13. 太郎が隣に部屋に荷物を運ぶ。
14. 太郎が植木に水をそそぐ。
15. 太郎がドアをひく。
16. 柳井がスピードの落ちた車を右側の立木に寄せた。(加納一朗『死霊の王国』)

さらには、複合動詞の事例に関しても

17. ドラゴンが大儀そうに目蓋を上げかけた瞬間、予め狙いをつけていたそこに槍を繰り出したのだった。(川又千秋『時間帝国』)
18. 王が、松明を壁の一角に差し込み、こちらに振り向いたところだ。(小松左京『探検の思想』)

13から18の事例においては、いずれの文も次の事態を共有している。それは、「ガ」でマークされている主体Xが「ヲ」でマークされている対象Yを、「ニ」でマークされている特定の空間「Z」に移動させるという事態を基盤に成り立っている。これ故、上記の動詞は一般に使役移動動詞として位置付けられる。これらを見る限り、動詞を中心とするアプローチの妥当性は言語事実からも十分に裏付けられるものと思われるであろう。

さて、文形成の諸問題において、統語フレームと動詞の関係には、いくつか複雑なものが絡んでいる。その問題の詳細は、本稿全体において考察されるであろうが、一先ず、「構文」の存在を示すにはいくつか厄介な問題がある。それは以下の二点としてまとめることができる。

- (5) 統語フレームの意味を話者の直感から直接導くことが困難である点
- (6) 文内の個別ユニット特有のエフェクトを抽出することが困難である点

まず、(5)の問題として、統語フレームの意味は、一般の日本語話者の直感から直接検証でき

る対象ではない。これは、「運ぶ」という語の意味を日本語話者の直感から導き出すことと、同じ手法で、「XがYにVする」の意味を導き出すことは困難であることを意味する。さらに、統語フレームの意味といっても、それはあくまで、動詞や名詞といった他の要素との相互作用から文全体において、同時に立ち表れてくるものである。これは、(6)が示すように、我々が文の意味と呼んでいるものは、しばしばそれ自体として一つのまとまりをなしており、ある種、自己完結的振舞いを見せることが多い。故に、分析者によって、ある切り出した形式のみのエフェクトを抽出することは非常に困難な作業であると言えよう。このような記述的困難さ故に、本稿では次節のような方法論をとる。

#### 4.2. 方法論上の主眼点

統語フレームのエフェクトを特定することが困難であるとは言え、そのすべてが不透明なものではない。というのは、ある文が他の文よりも、ある形式が持つ特性に対して、より透明な構造を持っているということは充分にありえる。こうした前提のもと、本稿では以下の三点に着目し、考察を進める。

- (7) 手掛かりの選定
- (8) 手掛かりとなる事例の適切な分析
- (9) 他の事例からの検証

統語フレームの意味を考えるにおいては、まず(7)の手掛かりとなる事例を選定する作業が要求される。この作業の条件として、他と要素、とりわけ動詞によるエフェクトが最大限少ないと思われる事例でなければならない。そして、(8)が示すように、手掛かりに対する適切な分析を行った上、裏にあると思われる構造を推定する。次に、(9)が示すように、(7)の手掛かりとなる事例に対する(8)の分析結果が他の事実においても妥当なものであるのか、記述的整合性を持ちうるのか、といった観点から検証する必要がある。上記の13から18の事例に関していえば、以下の事例が良い手掛かりになるであろう。

- 13'. 相手の男性がそんなあなたを受け止めてくれる広い心の持ち主なら、恋愛から幸福な結婚へとトントン拍子に話が運ぶことは間違いありません。

(ブレンダン・フレイザー『青春の輝き』)

- 14'. 桃の果汁のような陽の光が、松山の雪にいつばいに注ぎ、それからだんだん下流れ、そこらいちめん、雪のなかに白百合の花を咲かせました。

(幸田露伴『旅行の今昔』)

- 15'. 「敵が引くぞ、逃がすなっ!!」皇帝の馬車の近くで指揮をとっていたジュミレスはいきりたっていた。

(早川正『ブランディッシュ・アレス 呼び覚ます運命』)

- 16'. 真っ青な太平洋の波が岸に寄せては、白く砕けていく。

(円つぶら『太陽よ、素肌に愛を』)

- 17'. 三十一日午後十時の開門と同時に、待ち構えていた初もうで境内に客が繰り出し、人波で埋まった。

(毎日新聞 95年10月31日朝刊)

- 18'. 扉が開き、監獄の通路を何度も屈折した光が独房の中に差し込んだ。

(早川正『ブランディッシュ・アレス 呼び覚ます運命』)

上記の事例に関して、細かくみれば、13'のように起点から着点までが明確に表示された事例もあれば、15'のように、着点がマークされていない事例もある。以下では、そのような個々の相違はさておき、上記の事例全体を貫くある一点の関係、とりわけ、動詞と統語フレームの対応に焦点を置いて検討してみる。

13'から18'は、13から18とそれぞれ同じ動詞によって文が構成されている。しかし、それにも関わらず、前者は他動文型、後者は自動文型をベースにして文が成り立っている。こうした現象が仮に散在的に起こる例外事例であるならば、そう問題はないかも知れない。しかし、



これには動詞が持つ事態との対応関係、そして、文を支える統語フレームが持つ事態との対応関係といったものを明らかにすることによって、ある種の規則性を見出すことができる。

### 5. 他動詞と「XガYニVする」の共起事例に見られる特性

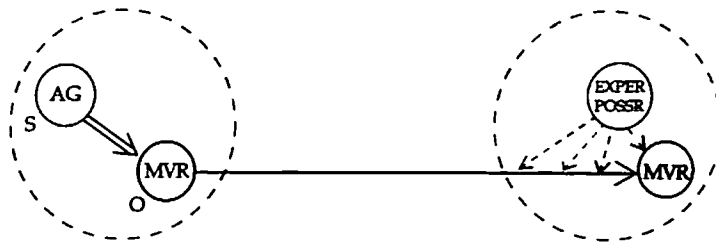
上記の13'から18'の事例、および、冒頭に挙げた1から3の事例は、あらゆる環境において観察されるわけではない。それは、冒頭で述べた通り、この現象が持つ特異な振舞いからも簡単に推測できる。この現象を動機付ける中核的傾向として、本稿では「動きを伴う位置変化の他動詞」である点に注目する。断っておくが、この制約は必ずしも、すべての事例において均等に観察されるものではなく、ある種の傾向性を探るためのものである点に注意しなければならない。

#### 5.1. エネルギー連鎖から見た位置変化の他動詞

本稿の現象に関わる動詞の多くは、明瞭な動きを伴う場所の移動に関わるものである。その証拠づけとして、いずれの動詞も「XガZニYヲVする」という統語フレームにおいて顕著な生産性を見せている点があげられる。

19. 彼女が酒場の別室に酒を運んできたとなん、夢は、現実のものとなった。  
(伊藤乃理子『ライフ』)
20. つまらなそうな顔を微かに窓に映す名草を見て、里美が路側帯に車を寄せた。  
(若林真紀『アル弗雷イザ』)
21. 丹がカップに紅茶を注いでいた。  
(電子雑誌『COMPANY』)
22. 赤馬地平が反対側へとドアの取っ手を引いた。  
(水沢蝶児『獅子と薔薇の銀河1』)
23. 二階の事務所の金庫が倒され何者かが扉の隙間に何かを差し込んで開けたような跡があった。  
(辻村零児『横浜探偵物語』)
24. 散開する兵の中、ボルタイとジュミレスがすかさず皇帝の馬車に馬を繰り出した。  
(早川正『ブランディッシュ・アレス 呼び覚ます運命』)

19から24の動詞のクラス形成を動機づけているものとして、以下の図2が示す次の事態が存在する。それは、動作主体(AG: agent)の行為によって、ヲでマークされる対象(MVR: mover)はある空間から別の空間へと位置変化を起こす事態と高頻度相関をなす点があげられる。つまり、というスキーマ的事態において生産的である。



Langacker (1990: 227)

図2

そして、上の事実を示唆する証拠付けの一つとして、辞書をはじめとするコーパスなどによる優先度があげられる。動詞をもとに、日本語のコーパスから検索したトークンを以下に示す。

✂ 運ぶ……………

18 物理的移動 23 身体動作 (動作)

N1がN2をN3へ/にN4で運ぶ N1 transport N2 to N3 by N4

[N1(3 主体) N2(533 具体物) N3(388 場所 2610 場) N4(986 乗り物)]

## ✂ 寄せる……………

18 物理的移動 23 身体動作 (動作)

N1がN2をN3に / へ 寄せる N1 put N2 to N3

[N1(3 主体 760 人工物) N2(533 具体物) N3(2 具体 2610 場)]

## ✂ 注ぐ……………

23 身体動作 (動作)

N1がN2をN3から / より N4に / へ 注ぐ N1 pour N2 out of N3 into N4

[N1(3 主体) N2(746 液体 838 食料) N3(533 具体物 2610 場) N4(533 具体物 2610 場)]

## ✂ 引く……………

18 物理的移動 (動作)

N1がN2をN3に / へ / まで 引く N1 pull N2 to N3

[N1(3 主体 535 動物 760 人工物) N2(2610 場 4 人 533 具体物) N3(388 場所 2610 場)]

## ✂ 差し込む……………

23 身体動作 (動作)

N1がN2をN3に 差し込む N1 insert N2 in/into N3

[N1(4 人 962 機械) N2(533 具体物) N3(533 具体物 2569 面)]

(NTT コミュニケーション科学基礎研究所「日本語語彙大系」<sup>3)</sup>)

上記のコーパスが示す動詞と統語フレームの相関、そして、それらが示す事態は、19から24に関わるいずれの動詞の最上位のトークンとしてヒットされるものである。こうした事実は、19から24の現象に見られる動詞は、そのスキーマの事態として、「主体が空間ニ対象ヲ移動させる」と関連づけられることを意味する。これらのことが偶然でない限り、他動詞文のゆらぎ現象が位置変化に関わる他動詞と関係づけられていることは明らかであろう。

以上の考察により、本稿の考察対象となる動詞が使役移動の事態と深い繋がりをもっていることが分かる。さて、その繋がりとはいかなるものかをより明確にしなければならない。一先ず、以下では使役移動という事態をどのように捉えるべきか、動詞の特性と統語フレームの特性をいかに捉えるべきかに関する本稿の立場を明確にする。

## 5.2 動詞の特性に関する諸問題

前節の動詞は、従米の見解に従うのであれば、「使役移動動詞」として規定されてきた(松本1997, 近刊, 影山1996, 2001)。しかし、この規定においては、いくつか考慮されなければならない点がある。それは「使役移動」という事態の記号化(使役と移動という複合事態)がすべて動詞の機能として過不足なく還元できるかという問題である。

(10) 使役は、純粋に動詞固有の機能として還元できるか。

(11) 移動は、純粋に動詞固有の機能として還元できるか。

(10)の問題意識を動機づけているのは仮に、使役を動詞のみの機能として還元した場合、本稿の事例とで不都合が生じる。とはいっても、本稿の現象で見られる統語フレームと動詞の不一致を根拠に、使役を純粋に統語フレームのみのエフェクトであると考えた場合、動詞が持つ使役が無視される。なぜならば、統語フレームが「使役」というエフェクトを持つならば、動詞がその機能を持つべき必然性は相対的に減少するからである。さらに、その種の論法を押し進めていくならば、19から24の事例に見られる動詞と統語フレームの生産的な相関関係は単なる偶然にすぎないものとなる。この種の論法においてもっとも危険なのは、「周辺事例を説明するため生産的なデータと矛盾する制約」をたてることである。

そして、(11)についても、(10)同様のジレンマに陥ることになる。これについては以下の事

<sup>3</sup> それぞれの番号は『日本語語彙体系』による(検索用の)概念カテゴリーを意味する。なお、「繰り出す」に関しては、「他動詞」とであると項目のみで、実際のトークンは挙げていなかった。

例から考えてみる。

- 25. a. 母が魚を焼いた。
- b. 母が子供に魚を焼いた。
- 26. a. 太郎がボールを蹴った。
- b. 太郎が次郎にボールを蹴った。
- 27. a. 花子が卵を割った。
- b. 花子がボールに卵を割った。
- 28. a. 花子がレモンをしぼった。
- b. 花子がコップにレモンをしぼった。

25から28の例に関して「焼く、蹴る、割る、しぼる」はaからも分かるように、事態の参与者間の働きかけを表す他動詞として記述される(詳細は寺村1982、山梨1995、影山1996参照)。よって、これらの動詞は本来、移動という事態との相関は持たないはずである。しかし、25.bと26.bでは、「XがZにYヲVする」において生起可能であると同時に、全体としてYのZへの移動を表している。そして27.bや28.bの場合も25.bや26.bと同様の統語フレームに生起しており、XがYという空間にZを移動させるという事態に対応している。つまり、文全体は動詞においては表れるはずのない意味、「特定の主体XはZに対象物Yを送り、ZはYの受容を許容する」事態と相関をなしている。

本稿のこれまでの考察から、こうした現象においては、移動に直接関係しない動詞「焼く、蹴る、割る、しぼる」とは別のユニットによって、移動という事態がエンコードされていると考えなければならないことになる。ただし、この問題に関しては、他にもいくつか考慮されねばならない問題もあり、これ以上、深入りすることはしない。

こうしたことを総合して考えてみた場合、文の意味たるものは、動詞のみか、統語フレームのみかという一方的観点からは捉えられない。というのは、文の意味を記述する際、統語フレーム固有の機能としてすべての特性を還元する立場、すなわち統語フレームの機能を拡大してしまう立場においては、話者の直感、および日本語の大部分の事例との間で矛盾を引き起こす。同様に動詞固有の機能として還元する立場、つまり動詞の機能を拡大する立場においては、周辺事例との間で矛盾を引き起こすというジレンマに陥る。こうした問題に対して、本稿は、動詞と統語フレームの相方向的関係から文現象を捉え、その中心には「構文」が存在することを示すことで解決を模索する。

いずれにしろ、本稿の現象において成立する動詞が位置変化を表す文と高い相関関係をなすという言語事実、および話者の直観そのものに関しては否定できない。よって本稿の現象を動機付ける一つの傾向として、位置変化、ないしは、移動に関わる動詞である点が挙げられる。ここで問うべきこととして、なぜ、位置変化に関わる動詞が自動文型において生起可能かという問題を考えなければならない。以下では、この問題に関して、構文文法的アプローチの先行研究を行った上、この枠組みにおいては、どのような分析が可能かという問題を考えてみたい。

## 6. 構文文法的アプローチ

構文文法とは、認知言語学一般において支持される経験基盤主義的視点をベースに、Fillmoreによるフレーム意味論、Lakoff(1987)によるICM(Idealized Cognitive Model)の研究、Langacker(1987, 1991)のシンボルとしての記号への視点(symbolic view)などの研究成果を盛り込みつつ、文における可能な制約を考える枠組みである。この種の流れを作り上げた代表的な研究としてFillmore et al.(1988)、および、Goldberg(1995, 1997, 1999)などがあげられる。この枠組みにおいては、「一般的抽象的統語規則の知識をもち、個々の語彙を学び、その統語規則を各々の語に当てはめたとしても自然な発話を生成したり、正確な理解にたどり着かない言語現象が頻繁に観察される」という素朴な疑問から、形式と意味の対からなる「文法構文(grammatical construction)」という概念を提唱している。この枠組みのもっとも基本的、かつ一貫した主張は、

「日常言語には形式(Form)と意味(Meaning)のペアからなる構文(construction)がその基本に存在する」ということである。そして、その形式はそれ自体として語、とりわけ動詞に還元できない特性を持つものであると同時に、未分解のゲシュタルトをなすと主張される。この種の観点は広くは認知言語学一般においても共有できるものである<sup>4</sup>。

構文文法的アプローチおよびその分析法にたつ研究は、主として英語を中心とする、語の線形的順序によって文(の統語構造)が成り立つタイプの言語においては活発な研究がなされてきた。しかし、日本語のように語順が緩く、むしろ、格助詞といった機能的要素によって、文の基本的類型が成り立つ言語においてはほとんど研究されてこなかった。よって、本稿の主張が正しいければ、それは自然と日本語においても「構文」的な視点が有効であることを示すことに繋がるであろう。

### 6.1. 「構文」の定義および英語における基本的「構文」

構文文法、とりわけ、Goldberg(1995,1999)の分析は、本稿の現象に対して、非常に示唆するものが多い。氏は、統語形式はそれ自体として動詞に還元できない意味を持つものとして主張しており、形式と意味がペアをなすものに対して、「構文」(construction)と呼んでいる。以下は氏によって示される「構文」の定義である。

C is a CONSTRUCTION iff<sub>def</sub> C is a form-meaning pair  $\langle F_i, S_j \rangle$  such that some aspect of  $F_i$  or some aspect of  $S_j$  is not strictly predictable from C's component parts or from other previously established constructions. Goldberg (1995: 4)

上記の定義からも分かるように「構文」は次の二点の特性によって定義される。1) 特定の形式に対して特定の意味がペアをなす点、2) 他の要素から厳密な予測が困難な点から定義される概念である<sup>5</sup>。そして、この見方に関しては、次のような前提に立っている点に注意しなければならない。それは、古典的意味論者において、しばしば言われてきた「文法的意味」と「語彙的意味」という二分法の見方は取らない点である(詳細はLangacker 1987 参照)。「構文」的立場においては認知文法同様、語彙(lexicon)と統語構造(syntax)の本質的な相違は想定しておらず、シンタクスにおいてもレキシコン同様、特定の音韻極(phonological pole)に対して、特定の意味極(semantic pole)の対応を認めている。この種の規定に従うのであれば、統語形式も語と同様、多義的であったり、特定の統語形式が別の統語形式を動機付けるといった規定が可能となる。とりわけ、英語における典型的な文法構文の例は、以下の表1のように示される。

Construction/ Example	Meaning	Form
1. Intransitive motion / The fly buzzed into the room	X moves to Y	Subj V Obl
2. Transitive / Pat cubed the meat	X acts on Y	Subj V Obj
3. Resultative / She kissed him unconscious	X causes Y to become Z	Subj V Obj X <sub>COMP</sub>
4. Double object / Pat faxed bill the letter	X causes Y to receive Z	Subj V Obj Obj2
5. Caused-motion / Pat sneezed the foam off the cappuccino	X causes Y to move Z	Subj V Obj Obl

Goldberg(1999:199)

表 .1

<sup>4</sup>Croft(1999)においては、認知言語学一般において共有できる construction の定義として Langacker(1987,1991) 的視点で言う Conventional Symbolic Unit であることが強調され、次の四点をあげている。

- [1] constructions are independent grammatical entities.
- [2] constructions exist to varying degrees of schematicity.
- [3] constructions are symbolic unit. they are complexes of form and function.
- [4] constructions are organized into a network of grammatical knowledge in the mind.

Croft(1999:64)

構文文法においては、表1に示される1から5の現象に関して、(右端の)形式は、自己組織的に(真中に示されている)特定の意味をそれ自体として、内包すると説く。例えば、4の Pat faxed bill the letter が持つ統語フレーム「Subj V Obj Obj2」はそれ自体として、「X causes Y to receive Z」という意味を(要素に還元できないものとして)内包すると主張しているのである。表1をめぐる詳細な議論は他にゆずることにして、以下では、1の自動移動構文(Intransitive motion construction)について考えてみることにする。

## 6.2. 自動移動構文 (Intransitive motion construction)

Goldberg(1995)では、英語における基本的統語形式、とりわけ、自動移動構文に関して言えば、主語(Subject)と動詞(Verb)、そして、場所に関わる斜格(Oblique)となる前置詞句が組み合わさって、一つの意味をなすと説く。その意味とは、「X moves to Y」つまり、「XのYへの自律的移動」である。これを本稿のこれまでの方法論に従い、エネルギー連鎖的視点から考えた場合、以下のように再規定できる。

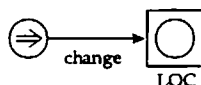


図3

図3においては、ある参加者が、自らのエネルギーで位置変化を引き起こしていること、つまり「ある参加者がある空間に対して、自らのエネルギーで自律的に移動する」事態が表されている。この種の言語形式と事態間の対応関係は Langacker(1987)の symbolic space 的視点から定式化した場合、以下のような対応関係をなすものとして規定できる。

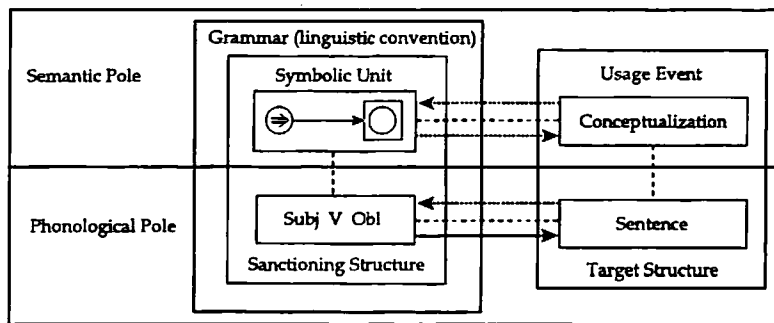


図4

図4において、縦の関係に注目した場合、使用イヴェント (Usage Event) における「概念化」と「文」の関係、そして、文法中の「Subj V Obl」の統語形式とその意味となる、「X moves to Y」とがシンボリックな関係をなす、ということが示されている。そして、横の関係に注目した場合、認可構造 (Sanctioning Structure) とターゲット構造 (Target Structure) の間ではそれぞれに対するスキーマ化(点線の矢印)と事例化のプロセス(直線の矢印)が関わっている。これらの点において、図4は、事態認知的観点から見た場合、特定の定着された統語形式そのものがある意味構造に対して、強い相関関係を持つという本稿の立場が図示されていると言える。

## 6.3 動詞と「構文」の可能な関係

「構文」的な視点を取り入れることにおいて、しばしば議論の焦点となるのは、以下の分布関係がみられる点である。

<sup>1</sup> この定義に従うのであれば、「構文」という単位は決して文レベルに限ったものではないことを意味する。

## 〈Double object construction〉

29. a. Sally baked Harry a cake.  
b. \*Joe angered Bob the pink slip.

## 〈Caused-motion construction〉

30. a. He sneezed the napkin off the table.  
b. \*Pat shot Sam across the room.

## 〈Intransitive motion construction〉

31. a. The boat sailed into the cave.  
b. \*The boat burned into the cave.

上記の a と b のそれぞれの事例は、いずれも同一の統語フレームにおいて生起している。しかし、前者の a が容認文であるのに対して、後者の b は一般に容認されない。これは、「構文」と動詞の結合は決してランダムなものでないこと、言い換えれば、ある種の可能な構造を規定する制約が存在することを示唆している。この種の分布関係は、動詞を中心とする枠組みにおいては動詞の意味上の共起制限として説明するであろう。しかし、Goldberg(1995)では動詞が項を取るといったタイプの記述が持つ循環論を厳しく批判しており、そのような立場はとらない。

しかし、動詞が項を取るという考えを破棄した以上、それに代わる考え方を提示しなければならない。この種の要請に対して、Goldberg(1995)では「構文」が示す事態と動詞が示す事態の可能な関係として、以下の制約のもと、問題を捉える。

Let  $e_c$  be the event type designated by the construction, and  $e_v$  the event type designated by the verb.  $e_v$  must be related to  $e_c$  in one of the following ways:

- A.  $e_v$  may be a subtype of  $e_c$ .
- B.  $e_v$  may designate the means of  $e_c$ .
- C.  $e_v$  may designate the result of  $e_c$ .
- D.  $e_v$  may designate a precondition of  $e_c$ .

Goldberg(1995:65)

上記の A から D に示される一般化は、32 から 35 の事例から検証することができる。

32. She gave him the ball.  
33. Pat faxed Bill the letter.  
34. The music lent the party a festive air.  
35. Joe permitted Chris an apple.

32 から 35 は、いずれも二重目的語構文の具体事例として生起している。この点において、いずれの文も「構文」の意味となる「X causes Y to receive Z」を基盤に成り立つ。そして、こうした「構文」が示す事態に対して、動詞は次のような関係でむすばれている。32 の動詞 *give* は「下位タイプ」を、33 の *fax* は「手段」を、34 の *lent* は「結果」を、35 の *permit* は「前提条件」を規定する関係として構成されている。個々の事例に対する詳細な分析は Goldberg(1995) にゆだねることにし、以下では、本稿の対象である自動移動構文における動詞と「構文」の結合に関して考えてみることにする。

36. a. The boat sailed into the cave.  
b. \*The boat burned into the cave.

Croft(1991:160)

36 の a と b において前者が容認文であるのに対して、後者は容認されない。Croft(1991)ではこの種の事実関係に対して、次のように説く。自動移動構文と動詞の可能な結合は動詞の行為が移動を引き起こす場合に限られる。36 で言えば、a の動詞が示す事態は、その行為によって、移動を引き起こすことが可能であるのに対して、b の動詞が示す事態は、その行為を行うことで、直接移動を引き起こすことはない。既述の Goldberg(1995) の制約によると、a は「構文」が示

す事態と *sail* という事態は、動詞の事態は「構文」の事態に対して「手段」を規定する (e, may designate the means of e.) 関係として、成り立っている。これに対して、b においては動詞が示す事態と「X が Y へと自動的に移動する」という意味の間に不都合が生じている。というのは、「燃える」ことは移動という事態の下位関係を規定することもなければ、移動の結果にもなれない。同然のことながら移動の手段にも前提条件にもなれない。

さらに、こうした制約は、動詞が示す事態と「構文」が示す事態は(事態間の)因果関係として結ばれていなければならないという、より一般的な制約を導き出してくれる (Goldberg 1995:86)。

## 7. 考察

### 7.1. 位置変化他動詞の特性と自動文型

構文文法においてなされたいくつかの観察は本稿におけるゆらぎ現象を考える上で、多くのことを示唆している。とりわけ、以下の事例を考えてみた場合、興味深い事実が浮かび上がってくる。

37. ベトナムの六カ国を流れるメコン川は日本の河川の総水量に当たる水が南シナ海に注ぎ、大河を作るのだ。(毎日新聞 95 年 7 月 3 日朝刊)
38. 敵兵が我々の陣地に寄せている。(伊藤孝昭「オバQ 主義者の憂鬱」)
39. そこからナンパ目的で女性陣が構内に繰り出す。(フォーカス No.44)
40. 室内に暖かい光が差し込んで、とても明るかった。(漆谷智行「ハンディキャップ」)

37 から 40 までの事例において、「ガ」格名詞はいずれも内在的エネルギーを持つ点、さらに、文全体は主格を示す「ガ」と斜格を示す「ニ」の組み合わせによる「X ガ Y ニ V する」をベースに成り立っている点、全体としてある場所への自動的移動を顕著に表している点である。すなわち、既述の自動移動構文が持つ形式と意味の特性を鮮明に示している。

構文文法の主張が経験的に適切なものであるならば、これまで見てきた他動詞文のゆらぎ現象の問題はもはや動詞の問題ではなく、「構文」を軸にすえた日本語の体系を示す象徴的現象であるという見通しがたつ。つまり、37 から 40 が示す、自律的移動の力を持った参加者がある場所に向かっていくという事態は動詞が示す事態ではなく、統語フレームが示す事態として規定できる。なぜならば、37 から 40 までの動詞はそのいずれも、本来ならば使役移動に関わる他動詞であり、動詞そのものに自動性を還元することは既述の通り、大きな問題を巻き起こすからである。こうした事実から日本語の自動文型「X ガ Y ニ V する」において語に還元されない「自動性」という特性を認めることができる。

そして、構文文法においてなされた二つ目の観察として動詞と「構文」の結合に関する議論は本稿において大きな疑問であった「なぜ位置変化の他動詞のみが自動文型において生起可能か」という問題に対して示唆するものが多い。

41. a. 光が部屋に差し込む。  
b. \*光が部屋に暖める。("光が部屋に当たって、部屋の中が暖まる"の意味で)
42. a. 川の水が海に注ぐ。  
b. \*川の水が海に汚す。("川の水が海に流れて、海を汚す"の意味で)

まず、41 の a は本稿で言う位置変化の他動詞の具体事例であり、b は対象に対する働きかけの他動詞の具体事例である。両者はいずれも他動詞によって成り立っている文である。しかし、問題は、前者が容認文であるのに対して、後者はなぜ容認されない点である。この問題をこれまでの考察をもとに捉えなおしてみた場合、次のような分析が可能となる。a は「構文」が示す自律的移動という事態に対して、手段や様態といった因果関係を形成しているのに対して、b の状態変化他動詞は「構文」が示す自律的移動の事態に対して、直接的な因果関係をもたないことに起因するものと分析できる。こうした分析は動詞を軸にした枠組みではまず不可能なも

のであり、「構文」を文の中心においた見方でのみ、可能な分析であると言える。

## 7.2. 「構文」的アプローチの検証

本稿の冒頭で示した他動詞文のゆらぎ現象を、「構文」的観点から捉えなおした場合、「XがYにVする」そのものが特定の事態と相関関係を持つものとしてまとめることができる。以下では、この種の一般化が他の現象とどのような整合性を示すのかという観点から、問題を再度、検証してみたいと思う。

自動移動構文を取り巻く言語現象は、決して、他動詞文のゆらぎ現象のみではない。というのは、43や44で見られるより一般的現象においても、容易に観察できる。

43. 太郎が海に行く。

44. 飛行機が海に落ちる。

43や44の現象は、従来移動動詞と呼ばれてきた「行く、落ちる」の具体事例である。従来の分析として、それぞれの動詞は、その語の意味として、移動主と移動先を要求するものとされる。しかし、この見方で、以下の事例を見た場合、どうであろうか。

45. ビル内の騒音が劇場に漏れることはありませんか。

(SONY シネマチック：よくある質問)

46. 彼はエドワールが分厚い扉の向こうに消えるのを苦々しげに見守った。

(川又千秋『時間帝国』)

45や46の現象においては、いずれの動詞も、従来の枠組みにおいては、移動動詞、すなわち、語の意味情報から、直接移動を示すものとしては、分析されてこなかった。この点において、43や44とは対称的事例である。しかし、その一方、45と46の事例は、44や45と次の点においては、共通の基盤を有する。形式的な側面として、いずれの「XがYにVする」を共有している、そして、いずれの事例も「XのYへの自律的移動」の事態を示している。ここで問題になるのは、動詞を中心にした分析では、43から46までの現象を貫く(形式と意味のペアからなる)言語事実を捉えるためには、「漏れる」や「消える」を移動動詞であると主張せねばならない点である。あるいは、移動動詞の周辺的現象、ないしは例外事例であると言わなければ、記述の一貫性がとれなくなる。しかし、この分析が日本語の母語話者の直感と矛盾するだけでなく、分析のアドホックさを示すものであることは、既述の通りである。

こうした事実は、これまで考察の対象となっていた、他動詞文のゆらぎ現象のみならず、一般の自動詞文においても自動移動構文の存在を裏付ける現象と位置づけることができる。さらに、43から46の言語事実に加わるものとして、以下の現象も見られたい。

43'. \* 太郎が海にあげれる。

44'. \* 飛行機が海に壊れる。

45'. \* ビル内の騒音が劇場に和らぐ。

46'. \* エドワールが分厚い扉の向こうに死ぬ。

43'から46'は、43から46の(動詞のみを置き換えた)ミニマルペアである。ここで、考えるべき問題は、43から46が容認文であるのに対し、43'から46'の事例は一般に容認されない点である。だが、ここで注目しなければならないことは、いずれの置き換え表現においても、動詞の特性が保持されている点である。というのも、43と43'においては、非能格動詞であるという特性が、44と44'、45と45'、そして、46と46'においては、非対格動詞であるという特性が保持されている。しかし、それにも関わらず、なぜ、後者の事例は一般に容認されないのだろうか。こうした可能な構造に関する制約はいかに記述されるべきであろうか。ここで、忘れてはならないことは、この種の言語事実の分布関係は明らかに動詞の統語的特性では、捉えられないということである。当然のことながら、動詞のレキシカルな情報からも上記の事実関係に対して予測を立てることは極めて困難である。



従来の見方においては、説明困難となる上記の言語事実を捉える上、Goldberg(1995)の分析は非常に有効である。というのは、氏の枠組みにおいて、動詞は必ずしも、文全体の意味、ないしは、その事態を直接にエンコードほどの情報をすべて持つ必要はない点が重要である。つまり、45や46の現象に関して、動詞そのものが移動の意味を持たなくても、「構文」の意味として記述することができること、すなわち、この枠組みにおいては、「漏れる」や「消える」を移動動詞であるという(日本語話者の直感と矛盾する)無理な分析は全く必要としない。と同時に、43'から46'の容認性に関する問題も、構文と動詞が持つ4つの意味的制約によって記述できる。それは、43や44は「動詞が示す事態は構文が示す事態の下位関係」をなしているのに対して、43'や44'はいずれの関係も持たないことによって、容認されない。同じく、45や46は「動詞の意味は構文の意味の結果の関係」をなしているのに対して、45'や46'はいずれの関係も持たないことから、容認されない。こうした「構文」を中心とする見方によって、自動移動構文において生起可能な動詞は以下のように分類できる。

1. 具体的移動を表す動詞: 行く・向かう・来る・上がる・下がる・降りる・帰る・近寄る
2. 移動の手段を表す動詞: 転がる・這う・泳ぐ・飛ぶ・転がる・差し込む・滑る・倒れる
3. 移動の結果を表す動詞: 消える・積もる・詰まる・垂れる・ぶつかる・あふれる

文の中心に「構文」を位置付ける枠組みにおいては、1の動詞は、「動詞の意味は構文が表す意味の(具体的)下位関係を規定するもの」と分析される。そして、2の動詞は、「動詞の意味は構文が表す意味の手段を規定するもの」、3の動詞は「動詞の意味は構文が表す意味の結果を規定するもの」として再規定される。

本稿のアプローチを取ることで、これまでみてきた「XがYにVする」という統語フレームに関わる(周辺からコアに至る)様々な言語事実を無理なく、捉えることができる。さらに、この種の分析の妥当性を示すもう一つの証拠として、次節で見ると、他の現象と矛盾なく、全体の構造を捉えることができる記述的利点がある。

## 8. 最後に(構文的アプローチの利点)

本稿では、他動詞文のゆらぎ現象を取り上げ、構文文法的観点から考察を行った。この考察により、従来の枠組みでは、見えてこなかったいくつかの性質が、より鮮明になった。こうしたことにより、「構文」的アプローチの有効性がある程度、示されたのではないかと考えられる。ここでは、最後として、「構文」的アプローチをとることによって、どのような一般的展望が開かれるのかについて、少し考えてみたい。

まず、本稿のアプローチをとることで、周辺事例における規則的振舞いが捉えられ、かつ、周辺からコアに至る日常言語の様々な分布関係が捉えられることになる。つまり、この種のアプローチをとることで、混沌とした周辺事例の不透明な構造が、もはやゆらぎでもなければ、不規則な例外事例でもなく、透明な現象として蘇ってくる。つまり、周辺事例が持つ一見、不規則的とも思われるその振舞いを、日本語が持つ「構文」というシステムから、正当に評価することができる。

そして、二つ目のメリットとして、むやみに動詞の意味を書き換える必要がない。これは現実の文のバリエーションによって、動詞の意味を書き換えるアプローチ、もしくは、動詞に対して複数のカテゴリーを認めるアプローチを取らず、より体系的な記述が可能であることを意味する。これに関しては、47の例から考えてみたい。

47. a. 雲が低く垂れる。……………「XがVする」
- b. 雨のしずくが床に垂れる。……………「XがYにVする」
- c. 父が釣り糸を垂れる。……………「XがYをVする」
- d. 子供が前掛けによだれを垂れる。……………「XがYにZをVする」

47のaからdに見られるそれぞれの文は、一つの動詞「垂れる」に対して、その横に示す4つの統語フレームが対応している。こうした交替現象を考えるにおいて、問題になるのは、互いの統語フレームにおいて、微妙な意味的ずれが生じていることである。こうした問題に対して、動詞を中心にした分析に従うのであれば、動詞「垂れる」は、47のaでは自動詞であり、状態動詞であると分析される。そして、bは自動詞であり、移動動詞であると分析され、cでは他動詞であり、働きかけ動詞、dでは他動詞であり、使役移動動詞であると分析されるであろう。このことは、動詞「垂れる」は、「自動詞、他動詞、状態動詞、移動動詞、働きかけ動詞、使役移動動詞」をプリミティブとして持っていなければならないものと規定せざるを得ないことを意味する。このように、この種の分析において、もっとも深刻な問題となるのは、現実には生じる文のバリエーションだけ、動詞の意味をたえず、書き換えて行かなければならず、記述の歯止めがきかなくなる。この点において、語の特性に基づく研究プログラムは、本質的限界を示すことになる。なぜなら、この種のアプローチでは動詞は一体いくつの意味を持つのかという問いに対して、全く答えられないからである。もっとも、上のリストが動詞「垂れる」の意味であるという主張の根拠は、「文の意味は動詞から捉えられる」という理論的仮説によってしか、証明されていないという矛盾を含んでおり、経験的な正しさを得ているものとは到底考えられない。

しかし、上記の分析に対して、「構文」的アプローチをとった場合、それぞれの文において生じる各々の意味は、本質的には「構文」の問題として位置づけられ、動詞に還元することで生じる様々な矛盾を克服できる。こうしたことから、「構文」的アプローチによって得られる最良の展望は、個々の現象を延々と拾いながら、動詞の意味をたえず書き換えていく循環論を避けることができるということに尽きると考えられる。

## 例文出展

川又千秋

『時間帝国』 <http://www5a.biglobe.ne.jp/~sakatam/book/author.html>

菊地秀行

『妖神グルメ』 <http://www.ceres.dti.ne.jp/~dune/kikuchilove/youjin.htm>

小葉武史

『sophia』 <http://aozora.gr.jp/main.html>

佐野良二

『尾なし犬』 <http://aozora.gr.jp/main.html>

筒井康隆

『自殺悲願』 <http://www.jali.or.jp/tti/jiten/all/all73.html>

津野潤

『子供をめぐる虚言』 <http://aozora.gr.jp/main.html>

夏目漱石

『明暗』 <http://aozora.gr.jp/main.html>

早川正

『ブランディッシュ・アレス 呼び覚ます運命』 <http://aozora.gr.jp/main.html>

拝名和巳

『夜の底は柔らかな幻』 <http://www.asahi-net.or.jp/~pv9a-ysok/haina/>

水沢蝶児

『獅子と薔薇の銀河』 <http://isweb29.infoseek.co.jp/novel/novelman/writer/>

水無月紫蘭

『表裏』 [http://www1.dti.ad.jp/userdir/s\\_25.html](http://www1.dti.ad.jp/userdir/s_25.html)

久保田早紀

『夜の底は柔らかな幻』 <http://www.avis.ne.jp/~takaike/saki/disco.html>

遠藤 齊

『砂時計の七不思議』 <http://aozora.gr.jp/main.html>

羅門祐人

『神々の巫子たち』 <http://member.nifty.ne.jp/hagu3/sneaker1.htm>

「ティレフェット」:

[http://www.bf.wakwak.com/~operator\\_7g/main.htm](http://www.bf.wakwak.com/~operator_7g/main.htm)

「雨の匂い」:

<http://www.remus.dti.ne.jp/~miz/plusa/dessert.html>

「子育てトーク」:

<http://www.tanuki.gr.jp/zo/talk/39.html>

「SONY シネマチック: よくある質問」:

<http://www.sonymcinematic.co.jp/produce>

## 参考文献

Croft, W.

1991. *Syntactic categories and Grammatical relation*. Chicago: The University of Chicago Press.

2000. "Logical and typological arguments for Radical Construction Grammar" Unpublished Paper.

Fillmore, Charles J.

1985. "Syntactic Intrusions and the Notion of Grammatical Construction". *BLS* 11. pp.73-86.

Fillmore, Charles J., Kay, Paul & O'Connor, Mary Catherine

1988 "Regularity and idiomaticity in grammatical constructions: the case of let alone". *Language* 64, pp. 501-538.

Goldberg, Adele. E.

1995. *Constructions: A Construction Grammar Approach to Argument Structure*. Chicago: The University of Chicago Press.

1997. "The Relationships between Verbs and Constructions". in Eve Sweetser & Kee dong Lee (eds.) *Lexical and Syntactical constructions and the Construction meaning*. Amsterdam: John Benjamins Publishing. pp.383-397.

1999. "The Emergence of the Semantics of Argument Structure Constructions". in Brian MacWhinney (ed.) *The Emergence of Language*. New Jersey: Lawrence Erlbaum Associates. pp.197-212.

福島直慕

1988. 「「病室を移る」と「病室を移す」一名詞の意味と文法的現象一」、「静修短期大学研究紀要」19、pp.26-42.

Johnson, Christopher.

1999. "Constructional Grounding". in Alan Cienki, Barbara J. Luka. and Michael B. Smith (eds.) *Conceptual and discourse factors in linguistic structure*. Stanford, Calif.: CSLI

Publications, pp.123-136.

影山太郎(編)

2001.『日英対照 動詞の意味と構文』、大修館書店.

影山太郎

1996.『動詞意味論—言語と認知の接点』、くろしお出版.

春日正三・桜井茂治

1979.『日本語の表現と構造』、双文社出版.

国広哲弥

1997.『理想の国語辞典』、大修館書店、pp.268-272.

国立国語研究所

1971.『動詞・形容詞問題語用例集』、秀英出版、pp.121-173.

Lakoff, George

1987. *Women, Fire, and Dangerous Things. What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: The University of Chicago Press.

Langacker, Ronald W.

1987 *Foundations of Cognitive Grammar*, Vol. I, *Theoretical Prerequisites*. Stanford, California: Stanford University Press.

1990 *Concept, Image, and Symbol. The Cognitive Basis of Grammar*, <<Cognitive Linguistics Research, 1>>. Berlin - New York: Mouton de Gruyter.

1991 *Foundations of Cognitive Grammar*, Vol. II, *Descriptive Application*. Stanford, California: Stanford University Press.

Levin, Beth & Tova R. Rapoport.

1992. "The Lexical semantics of verbs of motion: The perspective from unaccusativity". in Iggy M. Roca (ed.) *Thematic structure: Its role in grammar*. Dordrecht: Foris. pp.247-269.

1995. *Unaccusativity: At the Syntax-Lexical Semantics Interface*. Cambridge, Mass.: MIT Press.

松下大三郎

1923-1924.「動詞の自他被使動の研究(一)から完」、『国学院雑誌』29-12、30-1,2 (再録 須賀一好・早津恵美子(編)1996.『動詞の自他』、ひつじ書房、pp.13-40)

松本曜

1997.「空間移動の言語表現とその拡張」、『空間と移動の表現』、研究社出版、pp.125-229.

松本曜

(近刊).「使役移動構文における意味的制約」

森田良行

1990.「自他同形動詞の緒問題」、『国文学研究』102、早稲田大学国文学会、pp.331-341.

村木新次郎

1991.『日本語動詞の諸相』、ひつじ書房.

水谷静夫

1964.「「話を終わる」と「話を終える」」、『口語文法講座 3 ゆれている文法』、明治書院、pp.45-60.

NTT コミュニケーション科学基礎研究所

『日本語語彙大系 CD-ROM 版』、岩波書店

櫻井光昭

1977. 「古代語の再帰的他動詞」, 『学術研究 (国語国文学編)』26、早稲田大学教育学部、pp.50-72.

島田昌彦

1971. 『国語における自動詞と他動詞』、明治書院.

須賀一好

1980. 「併存する自動詞と他動詞の意味」, 『国語学』120、国語学会、pp.112-141.  
1981. 「自他違い—自動詞と目的語、そして、自他の分類—」, 『馬淵和夫博士体感記念 国語学論集』、大修館書店、pp.122-136.

鈴木英夫

1985. 「「ヲ + 自動詞」の消長について」, 『国語と国文学』、62-5、東京大学国語国文学会、pp.105-116.

Taniguchi, Kazumi

1994. "A Cognitive approach to the English Middle Construction". *English Linguistics*. Vol.11. English Linguistic Society Japan. pp.173-196.

Talmy, Leonard

- 2000 *Toward a cognitive semantics*, Vol. II. Cambridge: MIT Press.

寺村秀夫

1982. 『日本語のシンタクスと意味 I』、くろしお出版.

上野誠司・影山太郎

2001. 「移動と経路の表現」, 影山太郎 (編)、『日英対照 動詞の意味と構文』、大修館書店、pp. 40-68.

山梨正明

1995. 『認知文法論』、ひつじ書房.  
2000. 『認知言語学原理』、くろしお書店.

米山三明

2001. 「語の意味論」, 『語の意味と意味役割』、研究社出版、pp.1-85.